

出エジプト記33章 「顔と顔を合わせて」

1A 聖なる主のご臨在 1-6

1B 共に行かれない主 1-4

2B 抱えていた偶像の飾り物 5-6

2A 天幕での対話 7-17

1B 民の礼拝 7-11

2B 名で知っておられる主 12-17

3A 神の栄光を見る願い 18-23

本文

出エジプト記 33 章を開きましょう。イスラエルの民は、金の子牛を拝んだことによって、大きな傷を負いました。まず、モーセが山から降って、与えられた石の板を粉々に砕かれました。主の戒めをこんなにも早く、破ったためです。そして、金の子牛を粉々に砕き、水に混ぜて、それをイスラエルに飲ませました。それは、イスラエルが自分の犯した罪がどれだけ苦々しいものかを知るためです。ところが、です。それでも、悔い改めないで、まだ乱れている民がいました。そこでモーセは、たとえ家族でも、罪を犯している者は殺さなければいけないとしました。それでレビ人が立ち上がり、殺していきました。三千人が死んだとあります。そしてモーセは、罪の宥めができるかどうか、祈りに行くと言ったのです。そこでの祈りがとても痛々しいです。もし、主がイスラエルの民の罪を赦されないのであれば、自分の名をあなたの書物から消し去ってくださいと祈ったのです。これは、主から忘れられ、見捨てられ、永遠の地獄にいることを意味しています。それでも、イスラエルの民が滅びることを彼は願わなかったのです。しかし、主はさすがにこの祈りは聞かれませんでした。モーセの名を消さないで、ご自分の前に罪ある者のみを消し去ると言われたのです。

罪を犯すと、このように神の共同体に傷が与えられます。なぜなら、聖なる神が只中におられるからです。この方が聖であられるから、罪がそこに留まっていることはできません。そこで、痛々しい決断をしなければならなくなります。しかし、そのような懲らしめによって、主は私たちを聖め、再び立ち上がらせてくださいます(ヘブル 12:10-11)。そのイスラエルの立ち上がりの第一歩が33章に書いてあります。その立ち上がりとは、主のご臨在の回復です。

1A 聖なる主のご臨在 1-6

1B 共に行かれない主 1-4

1 【主】はモーセに言われた。「あなたも、あなたがエジプトの地から連れ上った民も、ここから上って行って、わたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓って、『これをあなたの子孫に与える』と言った地に行け。2 わたしはあなたがたの前に一人の使いを遣わし、カナン人、アモリ人、ヒッタイト人、

ペリジ人、ヒビ人、エブス人を追い払い、3 乳と蜜の流れる地にあなたがたを行かせる。しかし、わたしは、あなたがたのただ中であっては上らない。あなたがたはうなじを固くする民なので、わたしが途中であなたがたを絶ち滅ぼしてしまわないようにするためだ。」4 民はこの悪い知らせを聞いて嘆き悲しみ、一人も飾り物を身に着ける者はいなかった。

主は、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた約束の地に彼らを連れて行かせることは、約束されました。そして、約束の地にいる住民を追い出し、その乳と蜜の流れる地にも連れて行かれることも約束されました。それだけのすばらしい地であり、約束も実現します。しかし、これはとても悪い知らせでした。主ご自身が行くことはないと言われていました。「一人の使いを遣わし」と言われていますが、これは主の使いであり、この方が主の戦いを戦ってくださいます。ヨシヤ記にも、ヨシヤの前に抜き身の剣をもって方として現れ、万軍の主の将であると宣言されています。しかし、そのように勝利し、また豊かな土地に入ろうとも、主ご自身が行かないと言われているのです。

そのことに対して、民は嘆き悲しんでいます。これはとても良いことです、自分の罪を悲しんでいます、そしてその悲しみは、主がおられなくなるという悲しみなのです。イスラエルはエジプトにいた時から、主がおられたから、あの十の災いが下ったことを知っていました。自分たちの家畜が守られ、エジプトの家畜のみが疫病に打たれ、そして自分たちの長男が生かされ、エジプト人の長男がみな殺されました。そして、イスラエルは主がおられたから、飲む水がないときに水を飲むことができたのを知っていました。食べる物がないときに食物を与えられたのを知っていました。敵が自分たちを殺し始めたとき、その戦いに勝利を与えられたのを知りました。そして、シナイ山に降りてきてくださり、その黒雲や稲妻、角笛の音と共に、モーセに契約と律法を与えられたのを知っていました。神の御言葉の中にあるご臨在です。神がおられるからこそ、これらの祝福と救いがあるのであり、祝福と救いだけあるということは考えられなかったのです。

新約聖書において、弟子たちもそうでした。イエス様が、十字架につけられ復活し、それから天に昇られることを告げられた時に、弟子たちは非常に悲しくなりました。彼らが何を求めていたかと言うと、イエス様ご自身だったからです。この方がともにいることが、他の何にも取り替えることができないことでした。それでイエス様は慰め数多くを与えられました。例えば、ヨハネ 14 章 17-18 節を読みます。「ヨハ 14:17-18 この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです。わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます。」聖霊が来られる約束、そしてご自身に戻ってこられる約束をされました。

主はもちろん、どこにでもおられます。けれども、親しく交わるところのご臨在は聖霊が与えることができるものであり、そこに命があり、また救いの喜びがあります。ダビデが罪を犯した後に、こ

のように祈っていましたね。「詩 51:10-12 神よ私にきよい心を造り揺るがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から投げ捨てずあなたの聖なる御霊を私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを私に戻し仕えることを喜ぶ霊で私を支えてください。」

2B 抱えていた偶像の飾り物 5-6

5 【主】はモーセに次のように命じておられた。「イスラエルの子らに言え、『あなたがたは、うなじを固くする民だ。一時でも、あなたがたのただ中であって上って行こうものなら、わたしはあなたがたを絶ち滅ぼしてしまうだろう。今、飾り物を身から取り外しなさい。そうすれば、あなたがたのために何をすべきかを考えよう。』」6 それでイスラエルの子らは、ホレブの山以後、自分の飾り物を外した。

彼らが金の子牛を拝んだということをする前に、すでに心の中では妥協をしていたことが分かります。彼らは、この異教に関わる飾り物を身に付けながらこれまで旅をしていました。それで、実際にモーセがいなくなって四十日近く経っていたとき、彼らは我慢できなくなり、かつてのエジプトの異教の中に陥ってしまったのです。けれども、主の言葉が書かれている石の板が壊され、金の子牛の砕いた粉を水と共に呑み、そして三千人が死んだ今、自分が身に付けているこの飾り物が、いかに忌まわしいものかを悟ったのでしょう。そして、主ご自身が共におられないと聞き、今や、嫌悪感も抱いていたと思います。

私たちは、生活の中でちょっとした妥協をしていて、それが積み重なると、何かのきっかけで、その罪を大体的に犯してしまいます。パン種が粉全体に膨らむと、パウロが第一コリントで話したように、「このぐらいだったらよいだろう」という油断が大きく膨れ上がっていくのです。

2A 天幕での対話 7-17

そして場面は、宿営の外にある「会見の天幕」というところに移ります。モーセが、主が「わたしは一緒には行かない」と言われたことに対して、熱心にそうしないでくださいと嘆願しています。

1B 民の礼拝 7-11

7 さて、モーセはいつも天幕を取り、自分のためにこれを宿営の外の、宿営から離れたところに張り、そして、これを会見の天幕と呼んでいた。だれでも【主】に伺いを立てる者は、宿営の外にある会見の天幕に行くのを常としていた。8 モーセがこの天幕に出て行くときは、民はみな立ち上がり、それぞれ自分の天幕の入り口に立って、モーセが天幕に入るまで彼を見守った。9 モーセがその天幕に入ると、雲の柱が降りて来て、天幕の入り口に立った。こうして主はモーセと語られた。10 雲の柱が天幕の入り口に立つのを見ると、民はみな立ち上がって、それぞれ自分の天幕の入り口で伏し拝んだ。

まだ、主の幕屋が宿営の真ん中に張られる前のことです。民数記には、主の幕屋は宿営の真ん中に位置するように命じられています。それが張られる前は、民の宿営の外、離れたところに張っていたことが分かります。それもそのはずですね、祭司や犠牲の供え物の制度がしっかりとできていないところで、主ご自身が臨在されたら、それこそイスラエルの民は打たれて死んでしまうかもしれません。そして、「会見の天幕」と呼ばれています。主に会見するための天幕です。天幕というのは、まさに住まいのことです。私たちが自分の家に戻って、自分の部屋に戻って、最もほっとする空間に入った時の、その空間を天幕が表しています。主との親しみのある会話、対話のために、そのような天幕を設定したのです。そこに、主に伺いを立てたい人は誰でも入れるようでした。

ですから、民のうち、ここを利用した人たちがいたようですが、モーセがそこに入る時は、人々は立ち上がりました。それはモーセが確かに神の預言者であるという敬いがあったからです。現に、そこに神の臨在を示す雲の柱が立ちました。彼らが荒野の旅を始めた時以降に、主が共におられることを示している雲の柱が、モーセが天幕に入ると立っているのです。主がそこにおられるということを知り、民はそれぞれの天幕でひれ伏しているのです。すばらしいですね、ここで大事なのはモーセではありません。モーセを通して、主がここにおられるのだと強く意識しているのです。私たちも、それぞれ主に立てられ、主に仕えている者が動いている時に、そこで共におられる神が、何かを語られるかもしれないと信じる時に、聖霊が自分の心に語りかけられる機会を作ります。

11 【主】は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。モーセが宿営に帰るとき、彼の従者でヌンの子ヨシュアという若者が天幕から離れないでいた。

モーセと主との関係をよく表した表現が出てきています。「【主】は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。」とあります。これは実際の御顔をモーセが見ることができた、ということではありません。後ですぐに神の御顔をそのまま見ることはできない、と神がモーセに言われます。ここには、罪や不義によって妨げられることもない、深い信頼関係に支えられた、自由な交友関係を表しています。ヤコブ書で「神の友」とも呼ばれた、アブラハムも同じでした。「創世 18:17 【主】はこう考えられた。「わたしは、自分がしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」

モーセは羨ましいなと私たちは思っていますが、いいえ、大いなる恵みによって、主はご自分の弟子たちに同じ約束を与えてくださったのです。「ヨハ 15:13-15 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。」私たちが主の戒めを守る弟子となっているのであれば、イエス様は私たちの友となってくださるのです。それを知るには第一に、ここで主が言われている

ように、友のために命を捨ててくださった、つまり、あなたのためにいのちを捨ててくださったことを知ることです。そして、第二、その愛に応答して主の命令に従っているということです。

その「友」にある関係とは、「知らせている」ということ。私たちは近い関係であればあるほど、自分の心のうちにあることを打ち解けて話しますね。弟子になることの特権は、そういった友としての関係をイエス様と持っていることです。そこで私たちは、モーセのように主との親しい語り合いをする場所を持っているでしょうか？日々の生活において、どうしても主に申し上げたいという魂の叫びを言い述べることのできる場所を持っているでしょうか？そこには主がともにおられて、自分は自由に語り、主が理解を超えたところの平安を与えてくださる場所と時間です。

そしてヨシュアが、その天幕のそばでモーセに仕えていました。ホレブの山にモーセが行った時もそばにいましたし、そのようにしてヨシュアはモーセの次世代の指導者になる準備をしています。

2B 名で知っておられる主 12-17

12 さて、モーセは【主】に言った。「ご覧ください。あなたは私に『この民を連れ上れ』と言われます。しかし、だれを私と一緒に遣わすかを知らせてくださいません。しかも、あなたご自身が、『わたしは、あなたを名指して選び出した。あなたは特にわたしの心にかなっている』と言われました。13 今、もし私がみこころにかなっているのでしたら、どうかあなたの道を教えてください。そうすれば、私があなただけを知ることができ、みこころにかなうようになれる。この国民があなただけの民であることを心に留めてください。」14 主は言われた。「わたしの臨在がともに行き、あなたを休ませる。」

これが、顔と顔を合わせて語る関係です。モーセは、主に対して何か、だだをこねるかのよう、話っています。それだけ深い信頼関係があつて、話しかけています。後で、34 章で、主の栄光が過ぎ去る姿を見た時は、ひれ伏して、「ああ、主よ。もし私がみこころにかなっているのでしたら(9 節)」と言って、ひれ伏して嘆願している姿勢に戻っています。友のように語り、けれども、栄光に満ちた主なる神に対して申し上げています。

ここでモーセがこれだけ大胆になれている理由は、「わたしは、あなたを名指して選び出した。あなたは特にわたしの心にかなっている」と主が言われているからです。ここの、「名指して選び出した」というのは、「名前を知っている」と訳すこともできます。「名」というのは、人格的な関係を持つておることを示しています。私たちが名前と呼ばれたら、そこに人格をもって呼ばれていることがわかるでしょう。ユダヤ人がかつて強制収容所に入れられていた時に、数字の入れ墨が入れられて、数字で呼ばれていましたが、名前によって呼ばれると言うことは、人格の交流があるのです。主は、モーセを、名をもって知っておられたというのは、そういうことです。それから、「わたしの心にかなっている」は、口語訳では、「お前はまたわたしの前に恵みを得た」となっています。何か自分が良いことをしたから、モーセが神に気に入られているのではなく、神が一方向的に好意を寄せて

おられて、それのみこころにかなっていたのです。ダビデも、そのような人でした、サウルとは対照的に、神のみこころにかなう人でありましたが、一方的な好意を寄せられていたのです。

そういった視点から、主が黙示録にある教会に対して約束された言葉を読むと、慰めを受けますでしょう。「3:5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。」名前が神のいのちの書物に書き記されていて、そして、その名によってイエス様が、父なる神の前で言い表していただきます。

モーセは、ここで、主の道を教えてくださいと願っています。主が、モーセにこの国民を導きなさいと言われていたのですから、モーセは主の道を知りたいと願っています。彼はこれから民を導かないといけません。正しい道を知らなければ、どうやって導けばよいかわかりません。それで、あなたの道を教えてくださいと願っているのです。イスラエルは彼の民ではなく、神の民なのですから、特にそれが重要です。そこで主が「わたしの臨在がともに行き、あなたを休ませる。」と言われました。そうです、主ご自身が道なのですから、主が共におられることこそが道となります。主の道を守ることで、主が共におられ、臨在されることには相関関係があります。主の戒めを守っているところに、主はおられ、私たちに愛を注いでくださっています。「ヨハ 14:23 だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」

そして主が共におられれば、そこに安らぎがあります。「マタ 11:28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」モーセは、人々を導く時に、主がご臨在される場所で安らぎを得ることができます。私たちもキリストのおられるところで、安らぎを得ます。

15 モーセは言った。「もしあなたのご臨在がともに行かないのなら、私たちをここから導き上らないでください。16 私とあなたの民がみこころにかなっていることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちと一緒にいき、私とあなたの民が地上のすべての民と異なり、特別に扱われることによるのではないのでしょうか。」17 【主】はモーセに言われた。「あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名指して選び出したのだから。」

強く、主ご自身がともに行かれることを願っています。そしてモーセは、そのご臨在によって初めて、「あなたの民が地上のすべての民と異なり」と言っています。イスラエルが他の国より強大になるから、区別されるわけではありません。これが私たちの生活であれば、私たちの生活が幸せになるから、キリスト者であると世が認めるわけではありません。むしろ、世の人と同じように苦しみ

の中に入れられても、「この人には確かに、この人が信じているキリストがいる。」と認めざるを得ないほど、神の平安と愛、喜びに支えられた力を見るからです。

3A 神の栄光を見る願い 18-23

こうして、主の道を示してください、そして主がご臨在してくださいとモーセは願いました。私たちも、キリストの道を示され、その命令を守り、そしてキリストがおられることを知ります。そしてその先には何があるのでしょうか？そうです、神の栄光です。「1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」主の宮で、その麗しさを見たい、思いにふけりたいとダビデが詩篇で言っていましたね。その願いをモーセも述べるのです。

18 モーセは言った。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」19 主は言われた。「わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、【主】の名であなたの前に宣言する。わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」

「あなたの栄光を私に見せてください」ということが、私の心で最も大きな願いになっているかどうかを問われます。他の何か大きな業が起こることを願っているのか？それとも、主ご自身の栄光を見たいと願っているのか？パウロがエペソの聖徒たちに対する願いは、次のようなものでした。「エペ 1:6 それは、神がその愛する方にあつて私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。」「1:12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。」「1:14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。このことは、私たちが贖われて神のものとなされ、神の栄光がほめたたえられるためです。」すべてが、神の栄光をほめたたえるため、です。

そこで主は、その栄光を見せるために、「【主】の名であなたの前に宣言する」と言われます。先ほどお話ししましたように、名において人格が表れます。主の名に、主ご自身の本質が表れます。その名には、「わたしのあらゆる良きもの」があるのだということです。主は、良いお方です。ヘブル語で「トブ」と言います。天地を創造される時に、「良かった」という言葉がありますが、それがトブです。トブと言えば、それは神ご自身であるともいえるのです。神は良きお方です。

そして、「わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」という神の主権についても語っておられます。ここにモーセが決して、彼の行いがよかったから選ばれたのではないことが分かります。主が一方向的に彼に恵みを与えられ、それゆえにモーセの願いをこのように聞いてくださっている、ということです。パウロは、ローマ 9 章でこの箇所を引用して、こう言いました。「ロマ 9:15-16 神はモーセに言われました。「わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者をいつくしむ。」ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる

神によるのです。」このことを、私たちがどれだけ知っているのか？ということは、信仰生活において死活的です。言い換えれば、「すべては神が運んでおられるのだ」ということです。神によく思われようとして何か努力する世界ではなく、神が憐れもうとされているその憐れみを、神を信じる信仰の中で体験していくという世界です。

20 また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きることができないからである。」21 また【主】は言われた。「見よ、わたしの傍らに一つの場所がある。あなたは岩の上に立て。22 わたしの栄光が通り過ぎるときには、わたしはあなたを岩の裂け目に入れる。わたしが通り過ぎるまで、この手であなたをおおっておく。23 わたしが手をのけると、あなたはわたしのうしろを見るが、わたしの顔は決して見られない。」

主は、ご自分の栄光をお見せになりますが、「わたしの顔を見ることはできない。」と言われます。主の御顔を見たら、それを直視したら、ちょうど太陽に近づいていくかのように、たちまち燃え尽きて滅んでしまいます。聖書には、神の栄光の輝きの一部でも見てしまった者たちが、「ああ災いだ」として崩れてしまう場面がいくつかの箇所に出て来ます。イザヤがそうでした。ダニエルがそうでした。ヨハネも黙示録でそうでした。福音書では、イエス様の墓の番をしていたローマの兵士たちがそうでした。パウロが復活のイエスの栄光を見て、目が見えなくなってしまいました。ですから、その全てを見ることは決してできないのです。パウロが言いました、「I テモ 6:15-15 キリストの現れを、定められた時にもたらしてください、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、死ぬことがない唯一の方、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。この方に誉れと永遠の支配がありますように。アーメン。」けれども、唯一、独りだけ見た方がおられます。そう御子なるイエス・キリストです。「ヨハ 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」

しかし、父なる神を見たイエスがおられるからこそ、私たちは終わりの日、新天新地になって、天のエルサレムにおいては、屠られた子羊にあって、私たちは神の御顔を仰ぎ見ることができるようになります。「黙 22:3-4 もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。」

今回は、岩の間に入れられたモーセが、主にあって覆われて、その後ろ姿だけを見て、主の御名の宣言を聞く場面を読んでいきます。